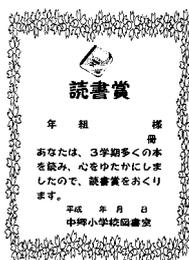


現代の子(人)の活字離れが多くなってきているという。本当にそうなのだろうか？  
私が近所の小学校の図書室にお世話になって今年で8年になるが、子どもたちはよく本を借りに図書室に来てくれる。しかしよく注意してみると、特に高学年の男子ではアニメ本を見ている子が多く目につく。そして以前は低学年の子が絵本をよく広げて楽しんでいただけ、このごろの子は絵本を紹介してもあまり興味を示さない。「ポケモン」や「ミッケ」などのように「読む」楽しさより「見る」「さがす」「ゲーム」の楽しさを求めているようだ。これだけテレビゲームが出まわる時代である、無理もないと思う。しかしそこで納得してはられない。なんとかして子どもたちに良い本を開かせたい、本を読む楽しさを知って欲しいと思い、案を講じてみた。

この小学校では、毎学期「多読賞」というものを出していた。1学期30冊以上、2学期40冊以上、3学期25冊以上、年間100冊を目標にしている。数字だけを追っていくと年間の100冊に5冊不足なので、毎学期「以上」という言葉がついて、少し努力するようになっているのだ。そして毎学期、目標に達した子には賞状を出した。年間多読の100冊に達した子には、学校長の名前が入った賞状を出してその努力をたたえた。(資料1)

また個人の貸し出しカードに目標に達した子には努力をたたえるシールを貼布してみた。目標の数字より高い多読賞には、キラキラ光るホログラムのシールを貼布した。なんでも物があり余っているこの時代を生きている子どもでも、このシールは大変嬉しかったらしく、今まで本を読まなかった子も図書室へ通い始めた。シールが貼られていることによって自分は目標に達せたという誇りと多読の中の多読の誇りが芽生えたと思う。しかしその反面冊数だけを合わせようとする気配も感じられたので、いつも個人カードをチェックしてそういう傾向にある子には自分で読める本を無理のないように読むように指導した。また学級の担任とも連絡をとり合い、子どもに負担がかからず楽しめる本を借りるよう指導していただいた。問題はもうひとつあった。家に本を借りて行っても読まない子がいるということだ。これは担任から親へ、親から担任へ連絡はもとより、家で読まない(読めない)子は、教室で休み時間に読んで個人カードに記入するという方法をとった。

〔資料1〕



ところが、年間の集計をしていくうちに気づいたことがある。〔資料2〕でわかるように、低学年、中学年では、まずまずの読書ができていたのに高学年になるにつれて読書量が減ってきているということである。高学年になると多くの行事の中心を担うことが多く、それがひとつの原因になっているということもいえなくはない。また担任の先生が、あまり本や、読書に関心がなかったりすると子どもたちも自然と図書室へ来なくなってしまうようである。平成14年度に入学した学年は、各学年毎によく読書ができていたように思われる。反対に平成13年度に入学した学年は、高学年になって読書量が落ちた典型的な例と思われる。

〔資料2〕

	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
1学年	5574人	3177人	2416人	3104人	4695人
2学年	3476人	5430人	5413人	3397人	2981人
3学年	3966人	3968人	4180人	4910人	2495人
4学年	4085人	4335人	4107人	5425人	4069人
5学年	2657人	2618人	4065人	1999人	4401人
6学年	2534人	2584人	2564人	3053人	1604人
3組		53人	18人	82人	93人

平成16年度からクラス数が減ってきているが、図書利用の人数は激減してはいないのが救いである。

低学年への絵本との親しみ方のひとつの方法として、読書の時間の「よみかせ」と、雨の日の休み時間の「よみかせ」を考えてみた。読書の時間は毎回という訳にはいれないが、担任の先生からの申し出があったときや、個人読書にあきてしまった子ども、及び自分で読むことを、おっくうがる子どもに対して行った。すると自分で読むことをおっくうがっていた子どもも真剣に耳をかたむけるのである。時には物語の中に入り込んでしまうほど真剣な場面もみられた。

雨の日の休み時間の「よみかせ」は空いている学習室に来た子たちを集めて行った。私がうっかりしていると「今日はよみかせないの？」と催促されることがあった。この「よみかせ」のときは、座って聴くだけでなく、身体を動かしたり、歌をうたったり、子どもも参加しながら楽しめる本を選ぶように心がけてみた〔資料3〕。

〔資料3〕



休み時間の「よみきかせ」には、中・高学年の子も来て聴いてくれることもある。図書委員の子どももやってみたいという声があったので、雨の日にいつでも「よみきかせ」ができるように1冊練習しておくように言っておいた。すると手があいていてやってみたいという子が来てくれるようになった。このことも小さい子どもが絵本に親しいむ良い機会であると思う。

先生が出張などのときの読書は、ふだんの教室での学習の緊張から開放されてとかく息抜きの時間になりがちである。45分の中で何回もイスから立って本ばかりとりかえる子、となりとおしゃべりを始めうるさくってしまう子、果ては走りまわる子など、真剣に読書をする子の妨げになってしまうことが見受けられた。そこで〔資料4〕のようなものを作って読後書かせてみた。すると今まではいつもうるさくっていた読書の時間が「シーン」と静まり返って集中して読書するようになった。

〔資料4〕



時間の終わりの15分程度で簡単な感想と気に入った場面の絵を描かせてみると意外に上手に書いているので嬉しくなってしまった。たとえ上手く書けない(描けない)子がいたとしても、なるべく良い所を見つけてほめるようにした。

ただここで考えなくてはいけないことは本来「読書」とは自分から楽しんでするものなのに、この方法では上からのおしつけになってしまうのではないかということである。授業中の上手い読書の方法をもう少し考えてみる必要がある。そして、やはり「読書」の習慣は小さいときからつけておかなければ急に本に親しめるはずがないと思う。親も教師も

子どもたちをひきつける良い本を選び、紹介する場を多く持つことが大切であると思う。

そこで、家庭でも学校の図書室での様子や、本選びのひとつの方法として毎月「としょだより」を出している。ここでは毎月図書室にある本の中から低・中・高にすすめたい本を紹介している。また、読書感想文、読書感想画のすいせん図書の紹介、夏休みと冬休み前に出される群馬県すいせん図書なども紹介している。

また「図書だより」では、毎月の各クラスの図書利用の様子や、学期毎の多読賞の紹介、雨の日のよみきかせの様子、子どもたちの本の紹介などものせるようにしている。図書室で発せられる子どもたちの「生」の声にも耳を傾け、その声のたよりもなるべく多くの家庭に届くように考えている。

最後になるが、ここで「としょかんまつり」についても記しておこうと思う。

毎月11月の第2週あたりに学校の「としょかんまつり」が開かれる。月曜日～金曜日までこの1週間は毎日本が2冊借りられる。このほか「本の題名しりとり」は低学年が10冊、中学年が20冊、高学年が30冊、本の題名で、しりとりをするゲームである。「絵本さがし」は校舎の各階に2枚と図書室のドアに貼られた「としょかんまつり」のポスターの絵の本を見つけるゲームで、どちらのゲームもできると「しおり」を1枚もらえらるという約束になっている。このゲームは、図書室にある本を再確認したり、気がつかなかった本に目を向ける良いチャンスになると思う。このほかに図書委員のおすすめの本のコーナーや、期間中の1日の中に「図書集会」を開き、低学年と高学年に分かれてのよみきかせも行っている〔資料5〕。



〔資料5〕

この日は、学校開放日にもなるので朝から父兄が姿を見せることもめずらしくない。ある新聞にこんな記事が載っていたのを目にした。

「アメリカの思想家・エマソンは次のようにつづっています。『良書を読むのは良い人との交りに似ている』』と。また「読書の魅力・活字のちからを、大人たちがしっかり伝えていくことが大切。子どものときから『読書週間』ならぬ『読書の習慣』を身につけさせたいものです。」と。

私たち子どもに寄り添う大人たちも県立図書館で企画される「図書館ボランティア講座」などを大いに利用して、子どもの活字ばなれが進まないよう努力しなければならないと思っている。

